

繰り返し起きる様々な自然災害。災害は、人間の弱さや社会の脆さを浮き彫りにする。特に2011年3月11日に起きた東日本大震災は、防災に多くの教訓を残した。被災者に対する災害支援のあり方もこの震災でより問われることとなった。そこで、東日本大震災の支援活動から得た災害支援のあり方を基に、静岡県の災害支援体制の現状を探ってみた。

災害支援事例集に学ぶ3つの視点

2012年5月に東日本大震災女性支援ネットワーク(※注1)が発行した『こんな支援が欲しかった!現場に学ぶ、女性と多様なニーズに配慮した災害支援事例集』は、東日本大震災の支援活動から得た、災害支援へのヒントを集めた実践事例集である。この事例集は、被災した女性への視点を尊重する支援環境づくりを目指すなかで作成された。

42の事例に、大きく3つの視点が示される。1つは、「多様性配慮の必要性」である。性別や年齢、障害の有無、国籍や母国語の違い、家族構成や就労状況など、置かれる立場やニーズが異なるなか、被災者を一括りにするのではなく、多様なニーズに耳を傾けることの重要性が説かれる。「多様なニーズに合わせた物資の配布」「避難所の困りごと」「女性職

員だから聞けたニーズ」「年代に応じた物資と情報の提供」などの具体事例からも多様性への配慮の必要性が伝わる。

2つ目は、「立場の弱い人々を視野に入れた支援の必要性」である。女性、子ども、障がい者、高齢者、外国人、性的マイノリティーといった、避難所や仮設住宅で声を出しにくい社会的立場の弱い人々の声を拾うことの大切さが、一人ひとりの尊重につながる。具体事例として「託老・託児の支援」「障害をもつ人への対応」「帰宅困難に陥った女性への場所の提供」「女性の起業支援」「外国人住民への配慮」などが挙げられる。

3つ目は、「支援者側が継続して支援するには」である。支援者も一人の間であり、特に被災地の自治体職員や地元支援団体も被災者である。災害が大きければ大きいほど長期的な支援が必要とされる。具体事例として挙げられる「災害でも出勤しなければいけない人の悩み」「ボランティアは適材適所に」「被災した方の関係の難しさ」などの項目か



PDFダウンロード版は、「減災と男女共同参画 研修推進センター」サイト内 <http://gdrr.org/2014/05/149/> でダウンロード可能

ら、支える側の負担も大きいことがわかる。また、この冊子の優れた点は、42の具体的な事例を震災直後、避難期、仮設住宅、復興期、常時の5つの「時期」と、支援する側を行政、地元団体、支援団体、ボランティアの4つの「支援者別」にまとめている点である。時期によって被災者の求めるニーズの違いや支援側の立場による支援のあり方が分かりやすく、活用しやすい。

注1:「東日本大震災女性支援ネットワーク」は定例の役割を終えたとして2014年3月に解散し、現在はメンバーの一部が活動を引き継ぎ、女性をはじめとする多様な人々のための災害支援のあり方についての研修を担う「減災と男女共同参画 研修推進センター」を開設している。

静岡県内の防災計画と災害支援活動への取り組み

静岡県内の防災計画と災害支援活動への取り組みでは、静岡県内の防災計画や災害支援活動に事例集が挙げる3つの視点は、生かされているのだろうか?静岡県は、これまでの防災や災害対応に多様な人々の配慮や男女共同参画の視点が欠けていたことを踏まえ、防災に男女共同参画の視点を取り入れようと動きだした。そこで、女性の視点を入れた三島市の防災対策と、これまで数多くの災害にボランティアを派遣してきた特定非営利法人静岡県ボランティア協会の具体的な動きを取材した。

三島市の場合（行政）

三島市は、東日本大震災後の2012年10月から防災対策に女性の視点を入れようと、意見交換会を実施してきた。年1回のペースで継続的に開催され、2014年11月に3回目が行われた。当日は、三島市の参加呼び掛けに自治会女性役員や町内会長、女性消防団員、子育て支援サイト運営者、女子大生など、防災から地域を良くしたいという意識の高い市民16人が集まった。豊岡三島市長と直接対話することで、スピーディーに意見が防災対策に反映される仕組みになっている。

過去2回の意見交換会で出された意見は、2014年3月に策定した「避難所運営基本マニュアル」に反映させた。各避難所で個別にあった運営マニュアルを三島市が共通したマ

ニュアルとして作り直したもので、このマニュアルには、女性や要配慮者支援を位置づけ、女性に配慮した避難所の運営や多様性への配慮が明文化されている。例えば、(1)各避難所に女性用更衣室、授乳室・育児スペース、女性専用窓口を設置すること(2)女性用もの干し場への配慮などである。マニュアルには当初、女性用もの干し場は、1階に配置されていたが、意見交換会での「1階は目につくので、2階にした方が良い」という意見で変更された。東日本大震災で被災した岩手県山田町出身の参加女性からは、「このようなマニュアルがあれば、山田町住民は避難所生活で辛い思いを軽減できたのではないか」という声が聞かれた。

今回の意見交換会では「避難所



の授乳室に防犯ブザーの設置」「年1回の防災訓練に小さい子どもがいても参加出来る仕組みが欲しい」など、生活者としての女性の視点からの意見も多く挙げられた。意見交換会にありがちなパブリックコメントではなく、女性の本音を直接市長に届けることに意味がある。様々な視点から防災力を高めていきたいという取り組みに、三島市の防災への意気込みが感じられた。

特定非営利活動法人 静岡県ボランティア協会の場合（支援団体）

特定非営利活動法人静岡県ボランティア協会は設立37年目を迎え、県内のボランティア団体の中間支援組織として幅広いボランティア活動を支援する。同協会では災害ボランティア活動が本格的に始まったのは、1995年の阪神淡路大震災以降である。現在では、災害関連事業は多岐に渡り、協会全体の活動の中で重要な活動の一つである。

静岡県災害ボランティアの派遣

東日本大震災における協会の活動は、震災直後に「ボランティア支援募金」や「毛布を送る活動」を実施。また、岩手県遠野市にボランティアの拠点・災害ボランティア支援センター（遠野まごころ寮）を共同で設置し、4月7日から12月末まで毎週ボランティアを静岡から派遣した。「遠野被災地支援ボランティアネットワーク（遠野まごころネット）」の後方支援として、派遣当初は、がれきの撤去や自宅の片づけなど、現地が必要

とされる支援を地道に行った。11月から仮設住宅での生活支援活動へと移っていく。

現在は、復興のためのボランティアや仮設住宅での足湯やサロン活動が中心となっている。派遣の際には、参加ボランティアに必ずオリエンテーションを行い、派遣の目的や被災者と向き合うために必要な心構えを確認し、健康チェックシートも兼ねた誓約書の提出を参加の条件としている。今までに延べ2,183人（平成26年12月現在）のボランティアを送り出した。ボランティア派遣拠点となった遠野まごころ寮は、男女別々に寝食出来るように配慮され、シャワー棟も男女別に使用でき、持続的な活動の大きな支えとなった。

ネットワークを生かした訓練

協会では、平時から横のつながりを災害時にも生かすため「静岡県内外の災害ボランティアによる救援活動のための図上訓練」を2005年度



遠野まごころ寮

2013年3月に一定の役割を終え閉所し、その後「三陸ふじのくに絆ハウス」として大槌町、釜石市で活用されてきた。

から行っている。現在は、防災関係以外の団体にも広く呼び掛け、昨年度は192団体、421人が参加した。「避難所における多様性のニーズへの対応」や「市町間でのボランティア情報共有」など、大規模災害時における支援団体の必要な課題を共有し、話し合うなど、災害支援のレベルアップや支援団体同士の交流を図っている。

協会の長年に渡る数々の災害支援活動や、平時における地道なネットワーク作りが、静岡県で被災した際、大きな力となりうるだろう。

なぜ、災害にジェンダーの視点が必要なのか

東日本大震災被災地における悩み・暴力相談窓口報告から見えること

20年前に起きた阪神淡路大震災以来、災害支援や復興に女性の視点やジェンダーの視点が必要性が叫ばれてきた。しかし、3・11東日本大震災の現場では、その教訓が十分に生かされず、多くの課題が残ったとされる。震災から4年、その反省を元に「災害とジェンダー」に関する議論が支援活動を続けるNGOや女性団体、女性研究者、男女共同参画を推進する行政などを中心に広がっている。しかし残念ながら、その中に男性は元より大多数の女性も含まれていない。なぜだろうか。

一番の理由は、なぜ、災害支援や復興にジェンダーの視点が必要なのか、人々の理解が進んでいないことにある。それは、「災害」と「ジェンダー」の結びつきが災害現場を経験した人にしか分からないからである。なぜなら、災害を体験したことのない人にとって、災害は想像の世界であり、現実味を帯びていない。また「ジェンダー」(※注1)が人を男と女で区分し、階層化することで、男女の関係を非対照化させていることに、多くの日本人が気づいていないか、あるいは是正しようとしていないことに大きな問題がある。

ジェンダーで苦しむのは、女性だけではない

「災害とジェンダー」に関する問題は、内閣府男女共同参画局が作成した「平成23、24、25年度東日本大震災被災地

における女性の悩み・暴力相談事業報告書」を読むとわかる。この報告書は、内閣府が岩手、宮城、福島県の3県で全国の専門相談員の協力を得て相談窓口を開設、その相談内容をまとめたものである。

3年間の相談者総数の性別を見ると、女性の11,038人に対し、男性は1,023人。男性相談者は女性の1割でしかない。ここにも「男が悩みを人に打ち明けるのは、恥」といったジェンダーによる弊害が読み取れる。また、男性は女性と比べ、情報へのアクセスや情報共有の機会が少ない可能性も考えられる。

次に相談内容を見てみる(表1)。どの年度も不安や抑うつ、PTSDなどの「心理的問題」が最も多い。次に生きがいや孤独・孤立などの「生き方」の問題である。男性にも女性にも共通して起きる問題であり、男性も相談する場が必要なのである。その機会が少ないことが、東北大震災に関連した男性自殺者数が女性のおよそ3倍(内閣府男女共同参画白書平成24年版)という結果に結びついた可能性も高い。

震災をきっかけに増加した配偶者からのDV

「災害とジェンダー」というと、すぐ思い浮かぶ説が、災害時における女性への性暴力の増加である。表1を見ると、3年間でDVの相談は1,415件、DV以外の相談は157件と、配偶者

からのDVが圧倒的に多い。そして、震災から年月を経るにつれDVの増加傾向が見られる。平成24年のDVの相談は666件で、その形態は、「精神的攻撃(経済的・社会的暴行含む)」が349件(52・4%)と最も多く、次いで「身体的暴行と精神的攻撃」が174件(26・1%)、「身体的暴行のみ」が67件(10・1%)であった。

一方、配偶者以外からの暴力に関する相談は84件。その内訳は、「強姦・強制わいせつ」が40件(47・6%)と最も多く、次いで「交際相手からの暴力」が26件(31・0%)、「売買春・ストーカーなど」が11件(13・1%)であった。

女性への暴力は、ジェンダー概念に基づく強者が弱者に対して行う権力の誇示そのものであり、犯罪行為である。しかし、DVは家庭の中で行われ、表面化しにくい上、日本社会ではこれまで、夫婦間の問題として片付けられてきた。「震災がDVに影響したかどうか」を尋ねる調査報告(表2)からも明らかのように、「震災後に表面化や悪化したケース」や「震災の影響は特に感じられないケース」を含め、日常的に行われていたDVが災害をきっかけにより、深刻になった様子がうかがえる。

性犯罪やDV防止のための取り組みは、災害時だけでなく平時から必要である。同時に、ジェンダーによる差別は正に社会全体で取り組むことが最重要課題と考えられる。

表1 相談内容(複数回答)

相談年度	平成23年度		平成24年度		平成25年度	
	件数	割合	件数	割合	件数	割合
心理的問題	651	21.8%	2,460	21.3%	2,317	21.1%
生き方(孤立)	453	15.2%	1,754	15.2%	2,002	18.2%
家族問題	442	14.8%	1,664	14.4%	1,401	12.8%
対人関係	249	8.3%	1,155	10.0%	1,018	9.3%
暮らし	300	10.0%	1,057	9.1%	888	8.1%
夫婦問題	285	9.5%	1,034	8.9%	872	7.9%
からだ	217	7.3%	916	7.9%	767	7.0%
仕事	203	6.8%	704	6.1%	734	6.7%
DV	156	5.2%	666	5.8%	593	5.4%
DV以外の暴力	19	0.6%	84	0.7%	54	0.5%
その他	15	0.5%	74	0.6%	325	3.0%
合計	2,990	100.0%	11,568	100.0%	10,971	100.0%

表2 震災がDVに影響したかどうか(回答者のみの統計)

震災の影響	平成23年度	平成24年度	平成25年度
あり	17	112	64
悪化・表面化	20	90	62
なし	16	77	76
不明	17	117	115
合計	70	396	317

単位:件

表1、2とも内閣府男女共同参画局平成23/24/25年度「東日本大震災被災地における女性の悩み・暴力相談事業報告書」より、筆者作成

※注1:生物学的な男女の違いを意味する性(sex)とは異なる社会的・文化的に形成される「男らしさ/女らしさ」を表す概念。[社会学小辞典:218]

(参考資料)
内閣府男女共同参画局のサイト「平成23/24/25年度 東日本大震災被災地における女性の悩み・暴力相談事業 報告書」(2015.1.18閲覧)
<http://www.gender.go.jp/policy/saigai/bo-reports.html>

内閣府男女共同参画白書平成24年版 東日本大震災に関する自殺者数の男女別割合(2015.1.18閲覧)
<http://www.gender.go.jp/whitepaper/h24/zentai/html/zuhyo/zuhyo01-00-31.html>

東日本大震災女性支援ネットワークHP(2015.1.18閲覧)
<http://risetotogether.jp/org/>

日常生活に取り入れる防災

皆さんは防災対策してますか？ 家具の固定や食料の備蓄、災害時の家族との連絡方法、避難の際のルートの確認など、万全ですか？

イヤ？いつかやるつもりです…のあなた！ ハードルは高いですか？

防災対策は、ニ・ガ・テというあなたに、とっておきのヒントをお教えます。防災を特別なことと考えずに、日常生活の中に防災の要素を取り入れてみてください。



自分に必要なものを用意。
中身はアレンジ自由！



袋に入れてみる。
100円ショップで購入した袋



A4サイズ。コンパクトにまとめて
このままりュックにいれるだけ

まずは、食料の備蓄。「ローリングストック」(循環備蓄)と呼ばれる方法を試してみよう！ 生鮮以外の食料品は、備蓄してあるものから先に使い、新たに購入したものは備蓄に回す、というだけの簡単さ。これなら仕舞い込むことはなく、賞味期限切れの心配もありません。

防災カードの作成もすぐに実行可能。メモ程度でも大丈夫。家族や知人の名前と電話番号を書いておき、それを持ち歩くだけでOKです。携帯電話を使うようになり、電話番号の暗記やアドレス帳を持ち歩くことは少なくなりました。番号がわからず電話ができない、ということがないように、あえて紙に書いておくのがポイントです。

非常持ち出し袋の準備はしていますか？

災害時に必要なものを持ち出すための「非常持ち出し袋」。準備をしていますか？と尋ねると、「万全です！」と応える人は、意外と多くありません。

「二応準備しているけれど、これでもいいのでしょうか」、「何をどう準備しているのかわかりません」、「食料や水を1週間分も持って逃げられませんか！」そんな答えが返ってきます。

もっと気軽に非常持ち出し

市販されている非常持ち出し袋は、必要なものが一度に揃うメリットがある反面、品質や品数をグレードアップすると、価格もグレードアップします。また、購入したことに安心して、押し入れに仕舞い込んだままの場合もあるかもしれません。それで本当に非常時に持ち出すことができるのでしょうか。

そこで、気軽な非常持ち出し袋を考えてみませんか。日常生活に、非常持ち出し袋を取り入れてみるのはどうでしょう。常に持ち歩くカバンの中に、必要なものを入れたきんちゃくやポーチ

チを1つ入れておきましょう。常備薬、救急用品、ティッシュ、小銭、携帯用懐中電灯など、中身は使う人が必要とするものを入れます。袋の中身を使ったら補充します。小さな子どもがいれば紙オムツやウェットシート、粉ミルク。高齢者がいれば介護食や紙オムツを用意することになるかもしれません。携帯電話を頻繁に使うのであれば携帯用のバッテリーがあると便利です。日常で使い慣れているものは、非常時にも問題なく使うことができます。

さらなる提案。自宅にあるものと100円ショップで揃う商品で非常持ち出し袋を作ってみましょう。手頃な金額で中身をしっかりと把握しながら揃えられるので、おすすめです。

避難先で、少しでも不便を解消して不安なく過ごすのに必要なものは何なのか。ちょっとした工夫とアイデアで「わたしの非常持ち出し袋」を完成させてみませんか。

非常食に挑戦!



非常時だ。料理は**男**におまかせ!

松永編集員奮戦記

非常時は自分の身は自分で守らねばならない。普段、台所に入ったことがない男だって、非常時に食べるものは、自分で調達せねばならない!

次に味! 缶詰類はそのままでOKだが、レトルトの雑炊は温めなければおいしくない。1日食べれば飽きてしまう。では、どうすれば持ち出し可能な重さに減らすことができ、味も少しはおいしくできるのか、考えた。

まず、発災当日は、混乱の中持ち出し用の非常食を食べるとしても、2日目以降は、火災さえ発生しなければ普段ストックしてある食材が利用できるはずだ(2日目以降の食材等は持ち出さない)。そうすれば、持ち出し用の非常食は1日分の4kgですみ、かつなんとか温かい料理を作ることができる。

早速、非常食づくりにチャレンジしてみた。ネットで検索すると、色々な非常食のレシピがヒットした。そこで、男の私でも簡単に作れ、以下の条件に適したレシピを選んでみた。

- ・その場にある食材を利用。
- ・食材や水は無駄なく使う。
- ・洗い物、ごみはできるだけ減らす。

今回は、どの家にもあるポリ袋を利用して簡単にできる白いご飯とおかず挑戦してみた。

非常食とは、災害などの非常時のために準備しておく食料。各家庭で必要な食料の目安として、最低3日間の食料と水を備えておき、いつでも持ち出せるようにしておく。特に、災害が起こった直後(発災~3日後)は火や水を使わず、開けてすぐ食べられるものがよい。例えば、ビスケット、乾パン、缶詰やレトルトの雑炊、ペットボトルの水(1日3リットル必要)やお茶等の飲料。

この3日分の非常食、どれくらいの重さになるのだろうか? 3日分の非常食を測ってみた(写真下)。食料が約3kg、水が9kg、合わせて12kg。非常時は他にも持ち出し品があるので、簡単に持ち出せる重さではない。



〈白いご飯〉

〈用具〉

鍋、カセットコンロ、
チャック付きポリ袋
水（ペットボトル）

〈材料〉（1人分）

米 コップ半分（約80g）
水 コップ半分強（約110g）

〈注意〉

- ・米は水を節約するため研がない。
- ・ポリ袋の中は、簡単にすすぐ。すすいだ水も鍋に入れて再利用。
- ・ポリ袋のまま食べればゴミが出ない。



米は、ポリ袋に水と入れて、30分間置く。

鍋の水をカセットコンロで沸騰させ、その中にポリ袋を入れ、落とし蓋をして30分間ゆでる。

30分経ったら火を止め、15分蒸らす。

男の つぶやき

- ・水と米は適当な分量にしてみたが水が多すぎた。きちんと計った方がおいしい。
- ・耐熱表示はあるが湯煎でもOKのポリ袋が見つからない。しかたなく、耐熱表示100℃のチャック付きのポリ袋を利用。
- ・ポリ袋の空気は、しっかり抜く。中の空気が膨張するので注意。
- ・ポリ袋が鍋に接して、変形するため、鍋に金属ザルを入れて湯煎。
- ・チャックが途中で開き、お湯が流入。ポリ袋を二重にすることで解決。

今回のレシピは、いろいろと試行錯誤しながらおいしくできた時のものを掲載した。失敗した料理も食べてみたが、多少ご飯が硬かった程度で問題はなかった。

〈簡単なおかず〉 家にあった材料でおかずも作った。

〈材料〉

人参 5cm（少し小さめな乱切り）
ジャガイモ 1個（皮を剥き、たて半分に切り、それぞれを3等分する。）
たまねぎ 半分（薄皮を剥き、3等分に切る）
スライスした干しいたけ 適量（水で戻す）
水 コップ約1/3強（約80cc）
調味料 大さじ3杯
（市販の「つゆの素」約45cc）

〈作り方〉

材料をそろえ、水、調味料と一緒にポリ袋に入れ、30分ゆでる。



男の つぶやき

切り方は適当で良い（写真参照）。最初人参は大きく、たまねぎは薄く切ってみたが、出来はまいち。何回かチャレンジした結果、人参は小さく、たまねぎは大きく切った方がおいしくできた。

今回は家にある食材を利用し非常食を作ってみた。温かい内に食べると、何でもおいしい。災害時には、温かい食べ物うれしいはずだ。